

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷三十五第

月七年六十和昭

論叢

日本的經濟原理……………經濟學博士 柴田敬

明治初年の諸藩の商社……………經濟學士 堀江保藏

ナチス經濟團體の成立……………經濟學士 靜田均

研究

チヌウドル王朝の海運政策……………經濟學士 佐波宣平

アダム・スミスに於ける愛國心と人類愛……………經濟學士 白杉庄一郎

商工組合中央金庫について……………經濟學士 田杉競

出產男女別の統計的研究……………經濟學士 青盛和雄

說苑

會計學に於ける概念と用語の問題……………經濟學士 尾上忠雄

廣域經濟の條件……………經濟學士 上杉正一郎

法幣と匯割……………經濟學博士 小島昌太郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

經濟論叢

第五十三卷 第壹號 (通卷第百拾叁號) 昭和十六年七月發行

論叢

日本的經濟原理

柴田 敬

はしがき

日本經濟學、日本國民經濟學、日本主義經濟學、日本統制經濟學、日本戰爭經濟學などの呼聲がだんだん大きくなつて、從來の社會經濟學や純粹經濟學などの影は次第に薄らいで行く。新しい經濟學が生れんとして生れ得ざる惱みの時代である。従つて新しい經濟學を標榜してゐるものも、その統一原理の問題は往々にして之を看過し、經濟原理従つて經濟基礎理論の關する限り從來の經濟學のそれを其まゝ借用し、それに多少の歪みを加へることによつて新しい經濟學が建設され得るものであるかの如く考へ、之に反して從來の經濟學に於ける經濟原理従つて經濟基礎理論を否定して新しき經濟原理に立脚せんとするものも、其の新しき經濟原理は往々にして之を從來のそれとは全然別個のものとして提唱せんとしてゐる。併しながら、これから建設せらるべきものが新し

い經濟學であるが爲にはそれは、從來の經濟學のそれとは異つた新しい經濟原理に立脚せるものでなければならぬと共に、從來の經濟學のそれと全然縁もゆかりも無い原理に立脚せるものであつてはならぬ。けだし、今更言ふまでもない様に、從來の經濟原理に立脚せる基礎理論を其のままに襲踏せるものは如何にその上に夾雜物を加へ歪みを施したとしても新しい經濟學とは言はれ得ないのであり、從來の經濟學のそれと全然縁もゆかりも無い原理に立脚せるものは經濟學とは言はれ得ないのであるから。従つて、新しい經濟學は從來の經濟學のそれを揚棄せるより高き經濟原理に立脚せる基礎理論を持つものでなければならぬ。斯くの如き經濟原理従つて經濟基礎理論は如何なるものであるか、從來の經濟學の夫を如何に揚棄せるものであるか、と言ふ問題の解決は、現代の理論經濟學徒に課せられたる重大なる課題の一つである。本稿は私の日本經濟理論講義案中で此の點に關する卑見を述べた部分の要領と摘記したものである。日本經濟理論の講義は何分にも最初の事であり、不慮の誤謬を冒してゐる危険もあるので、敢えて未熟なるがまゝに之を發表して、先覺の叱正を仰がんとするのである。

一 一般的經濟原理

經濟原理、より正確に言へば一般的經濟原理は、經濟一般を存立せしめてゐる所の原理であり、總ての經濟活動に於て本質的に支配する所の原理である。

從來の經濟學に於いて一般的經濟原理として取扱はれたものに、一方では極大満足の原理乃至經濟原則と呼ばれるものがあり、他方では極大搾取の原理がある。併し、極大搾取の原理は支配層の極大満足の原理と考へる事が出来るので、我々は極大満足の原理を以て從來の經濟學に於ける一般的經濟原理と看做し得るであらう。

極大満足の原理は確に經濟を支配する原理であつて、それから全然離れて新しい經濟原理を考へることは出来ないのである。併しながら、若し所謂極大満足の原理が一般的經濟原理であるならば、嚴密なる意味に於いて新しい經濟學を建設せんと努力することは、徒勞と言はねばならない。舊き經濟學の沼の中に深く踏み込んだ人は實際、新しき經濟學の建設に苦しめる者の努力を、徒勞として憐んですらゐるのである。併しながら、所謂極大満足の原理は二つの點に於て限界を持つてゐるのであり、従つて一般的經濟原理ではあり得ないのであり、實は眞の意味に於ける極大満足の原理ですらないのである。極大満足の原理を徹底せしめるならば所謂極大満足の原理ではなくるのであり、所謂極大満足の原理に執着してゐたのでは極大満足は期し得られないのである。

所謂極大満足の原理の限界の第一のものは人の物に對する關係に於けるその規定に關して存する。即ち、所謂極大満足の原理の規定に際しては、一方では所謂極大満足の原理の發現の爲の所謂經濟的商量に勞費を要する事が捨象されそれに要する勞費を無視して所謂經濟的商量が徹底的に行はれるものと假定されてゐるのであり、他方では異りたる欲望の間殊に異りたる段階の欲望の間に補充關係の存する事が捨象されてゐる。而して此の後者の點は特に重要なのであり、今一步説明を要するのである。

周知の如く、極大満足の原理を展開するに際して、初期の主觀派經濟學者は各種の欲望の欲望強度函數が相互に無關係に與へられる事を前提してゐたのであるが、今日に於ては主觀派經濟學者と雖も斯かる前提を置いてゐない。即ち今日に於ては、各種の欲望が相互に相殺的、代用的又は補充的の關係を有し得る事を考慮に入れて、極大満足の原理を展開してゐるのである。併しながら、消費主體としての經濟的商量と企業主體としての經濟的商量とは全然別々になされるものと考へられてゐるのである。けだし、極大満足の原理の展開に際して、生産は

欲望充足手段の調達と言ふ派生的欲望の充足だけの爲に行はれるものと考へられ、生産が行はれるのは欲望充足手段の調達と言ふ派生的欲望の充足の爲であると同時に、生産其の事に價値を認める本來的欲望の充足の爲でもある、と言ふ事が看過せられてゐるからである。然るに、如何なる生産も、一方では、生産其の事に價値を認めて行はれるのでなければ充分なる熱意を以て行はれ得ないのであり従つて充分なる効果を擧げ得ないのであり、他方では、生産されるものが何かに役に立つと言ふ事が自覺されてゐるのでなければ充分なる自信を以て行はれ得ないのであり従つて充分なる効果を擧げ得ないのである。従つて、生産其の事に價値を認めて生産を行ふ事によつて生産物に依つて充足さるべき欲望をよりよく充足することが出来、生産されるもの手段性を自覺して生産を行ふ事によつて生産其の事に價値を認める欲望をよりよく充足することが出来るのである。即ち派生的と本來的との異つた段階の欲望の間には補完關係があるのであり、此の補完關係は之を自覺に高めて調整する事によつて¹⁾より有効に發揮出来るのである。然るに正に此の點が所謂極大満足の原理に執着してゐたのでは實現出来ないのである。

所謂極大満足の原理の限界の第二のものは、人の人に對する關係に於けるその規定に關して存する。即ち、所謂極大満足の原理の規定に際しては、個の利益を主義とする所の個人主義的立場が堅持され、超個人主義的の立場が捨象されてゐるのであるが、人は社會²⁾に於いて在る事によつてはじめて生存し得るものであり、社會の支持を俟ち祖先傳來の技術を繼承し過去の勞働の結晶としての蓄積資本財の援助を藉る事なしには生産も消費もなし得るものであるが故に、何等かの程度に於て常に超個人主義的立場に立脚するのであり、其の事を自覺に高め自覺的に超個人主義的立場に徹することによつてはじめて眞の意味の極大満足が期し得られるのである。然

- 1) より正確に言へば、「手段意識もなく目的意識もない境地に高める事によつて」
- 2) 本稿に於いて、私は、特にことわる場合の外、社會なる語を、國家をも社會の一種と言ふ如き、廣義に於いて用うる。

るに正に此の點が所謂極大満足の原理の規定に際して捨象されてゐるのであり、共同的に作業する生産的勞働者の間の補充關係も代用關係に代置して展開せられる事になつてゐるのである。

斯くの如く、異りたる欲望殊に異りたる段階の欲望の間には何等かの程度及仕方に於て常に補充關係が認められるのであり、又、經濟生活上の人の立場には何等かの程度及仕方に於て超個人主義的なるものが含まれてゐるのであるが、此の程度乃至仕方は時により國によつて異なるのであり、こゝに時代的經濟原理が生じ、各國的經濟原理が生ずることになるのである。而して此の異りたる段階の欲望の間に補充關係を認める程度及仕方の時乃至國による相違と、超個人主義的立場の支配する程度及仕方の時乃至國による相違とは、相互に密接なる關聯を有するのである。即ち個人主義的立場の支配する程度が大であればあるほど、目的生活と手段生活を切り離す傾向が強くなり、従つて、異りたる段階の欲望の間の補充關係を輕視する傾向が強いのである。所謂極大満足の原則は個人主義の支配する歴史段階に照應して特殊化されたる一般的經濟原理、即ち個人主義時代的經濟原理に過ぎないのであり、個人主義的性格の強い國に照應して特殊化されたる一般的經濟原理、即ち個人主義國、的經濟原理に過ぎないのである。即ち所謂極大満足の原理は、一般的經濟原理ではあり得ないのである。

經濟學が一つの科學として形成されたのは個人主義支配の時代の事であり個人主義的性格強き英國に於ての事であるが故に、從來の經濟學は個人主義時代、的個人主義國、的經濟原理を恰も一般的經濟原理であるかの如く誤認したのであるが、個人主義支配の未だ徹せざる時代及國の經濟の理解に際しては、從來の經濟學は、史實に忠實ならんとする限り、其の所謂經濟原理から離脱しなければならなかつたのである。即ち例へば中世經濟史の研究に際しては、從來の經濟學も、經濟史實に忠實ならんが爲には、全體主義的經濟原理を、従つて、所謂極大満足

どころか却つて禁欲的命令服従的——支配階級は神及び傳統の命に被支配階級は支配階級及び傳統の命に服する——且補充關係強制的なる經濟原理の支配を、認めてかゝらねばならなかつたのである。

元來人は親子夫婦同胞等より成る所の血縁共同體に於てはじめて生を享けるばかりでなく斯の如き血縁共同體に包攝されて育成される事によつてはじめて生育し得るものであるが故に血縁共同體は最も本源的な原型的な社會である。而して經濟は社會經濟³⁾としてはじめて存立し得るものである。従つて、經濟原理は元來共同體的性格を持つものであり、個人主義時代の經濟原理や全體主義時代の經濟原理やが分化發展する以前に於ては、共同體主義的經濟原理が現實に支配してゐたのである。例へば氏族共同體的經濟原理はさうである。併しながら、原初的血縁共同體は正に原初的血縁共同體なるが故に、血の共同と言ふ自然的基礎に本能的に基くのであり、従つて血縁外に對しては排他的非共同體的たらざるを得ないのであり、従つて、ヨリ以上の發展の爲には原初的血縁性を脱皮しなければならぬのである。然るに、血縁の及ぶ範圍を越える範圍の社會の基礎としての地縁は、それ自體としては未決定のものであり、それを地縁たらしめる所の社會的基礎を俟つてはじめて地縁たり得るのであり、斯かる社會的基礎と考へられる所の私的相互的交渉は社會の結成を俟つてはじめて充分に發展し得るに過ぎないのであり、それ自體としては本來的に社會的基礎たり得ないのである。従つて、原初的血縁共同體の原初的血縁性の脱皮従つて原初的血縁の及ぶ範圍を越える範圍の共同體——國家——の結成が必至となる時、其の社會的基礎は全體主義的權力的ものたらざるを得ないのである。然るに、斯くして國家が生れる時には國家成立の過程に於いて既に發芽せるところの——それ自身は本來的に共同體的基礎たり得ない所の——私的相互的交渉が、國家によつて發展の地盤を與へられる事になり、其の發展が一定の段階に進むや否や國家の社會的基礎を

3) 註 2 參照。

却つて個人主義的相互的のものへ變質せしめるに至るのである。而して社會的基礎の斯くの如き展開に照應して、元來共同體的なる而して原初的血縁共同體の下に於いて本能的ながらそれとして現實に作用せるところの一般的經濟原理は、全體主義的（命令服從的）禁欲的なる時代的經濟原理へ分化發展し、やがて更に、個人主義的功利的（所謂極大満足的）なる時代の經濟原理へ再分化發展するのである。然るに、個人主義的相互的なるものへの國家的社會的基礎的發展は、それが一定の限度を越す時には、却つて國家的社會的基礎に龜裂を生ぜしめるものであり、從つて個人主義的相互的なるものよりヨリ以上のものへの國家的社會的基礎の飛躍を必至にするのである。而して今日が正に其の段階にあるのである。然るに、個人主義は個の能力の自覺的發揮を約束し得る點に於て全體主義よりもヨリ高きものである。從つて、個人主義が行詰つたからと言つて、若し全體主義に歸るが如き事があるとするならば、それは國家的社會的基礎の進歩ではない。それは却つて逆轉に過ぎない。この飛躍は、個人主義の下に於いてよりもヨリ以上に個の能力の自覺的發揮を約束し得るが如きものへの移行によらねばならぬ。從つて此の飛躍は、國家的社會的基礎の全體主義的權力的に分化發展したる面と個人主義的相互的に分化發展したる面とを相互に生かし合はせるが如き仕方にて統一したるもの、即ち眞に自覺的に共同體的なる國家的社會的基礎、への移行によらねばならぬ。從つて、此の事に照應して、經濟原理も亦其の全體主義的禁欲的なるものへ分化發展したる面と個人主義的功利的なるものへ分化發展したる面とを相互に生かし合はせるが如き仕方にて統一したるもの、自覺的に共同體的なるもの、へ高まらねばならぬ。斯くして嘗ては本能的に支配したる共同體的經濟原理は、今や自覺的に支配することになるのであり、それによつてヨリ經濟原理的となるのである。斯くの如きものであるが故に、共同體的經濟原理こそは一般的經濟原理なのである。

二 日本的經濟原理の形成

右に述べたる如く、從來の所謂一般的經濟原理は實は一般的經濟原理でなく個人主義の支配せる歴史段階に照應して特殊化されたる一般的經濟原理即ち個人主義時代の經濟原理に過ぎないのであり、共同體的經濟原理こそ經濟一般を存立せしめてゐる所の一般的經濟原理であり、此の一般的經濟原理は原初的血縁共同體經濟の場合には現實に經濟を支配するのであるが、其の支配は本能的であり従て限界を持つが故に、其の限界が共同體のヨリ以上の發展の桎梏となるに至るや否や一般的經濟原理は全體主義的禁欲的なる面を分化發展せしめるのであり、やがて更に個人主義的功利的なる面を再分化發展せしめるのであるが、此の個人主義的功利的なる面の分化發展が其の度を越して國家經濟を却つて破綻に瀕せしめるやうになる時には、一般的經濟原理は斯くの如く分化發展せしめられたる其の二つの面を相互に生かし合はせるが如き仕方にて統一したる眞に一般的經濟原理的なるものへ高まらんとするのである。而して斯くの如く時代によつて其の顯現を異にする以上、一般的經濟原理は國によつても其の顯現を異にする筈である。實際、曩に述べたる如く、從來の經濟學の所謂一般的經濟原理は、個人主義の支配する歴史段階に照應して特殊化された所の一般的經濟原理即ち個人主義時代の經濟原理であると共に、個人主義的性格の強い國の事情に照應して特殊化された所の一般的經濟原理即ち個人主義國的經濟原理でもあるのである。

斯くの如く、一般的經濟原理は國を異にするに従つて其の顯現を異にするのであり、此の國に従る顯現の相異は恰も時に従る顯現の相異が共同體の原初血縁性の脱皮の時から生ずるが如く、原初血縁性の脱皮の過程に於い

て主として形成されるのである。而してそれには、恰も一般的經濟原理の時による顯現の相異に理由乃至原因がある如く、その理由乃至原因があるのである。斯くの如き理由乃至原因は之を環境的事情と主體的事情とに分つことが出来る。而して環境的事情は更に自然環境的のものと社會環境的のものとに分けられる。

一般的經濟原理の日本に於ける顯現に特徴を與へる自然的環境として特に擧げらるべきものは、一方では日本の氣候風土が灌溉農業を必至ならしめる如きものである事であり、他方では日本の地勢が極めて複雑であり氣候が多様であり且變化に富むものである事である。ただし、灌溉農業を必至とするが如き自然的環境の下に生存する社會は、一方では灌溉施設の爲に共働作業を必要とするが故に共同體的性格を保存する必要がある、他方では農業的生產過程に於いて特に細心なる注意を要するが故に奴隸勞働に依存するを得ず従つて奴隸勞働の普及による共同體の破壊を免れるのである。従つて、灌溉農業を必至とするが如き自然的環境の下に生存する東洋諸國に於いては特に共同體なるものが長く殘存するのであるが、斯くの如き範疇の國に日本も亦屬してゐるのである。此の點に於いて既に日本は共同體的に性格づけらるべき自然的環境下にあるのであるが、更に、日本は地勢が極めて複雑であり氣候が多様であり且變化に富むために、如何なるものにも順應し如何なるものをも活用し得る能力を自らのうちに發達させる事になつたのであり、此の點に於いても共同體的に性格づけられる事になつたのである。

一般的經濟原理の日本に於ける顯現に特徴を與へる社會的環境として特に擧げらるべきものは、日本が島國である爲に隣邦諸國の攪亂作用から免れて自己自身を保持し得ながら、而も隣邦諸國と全然隔離されることなく必要なる文化的刺激を順次に隣邦諸國に仰ぎ得た事である。此の事は日本の他國文化消化力の育成に貢獻し日本の

共同體的性格付けに役立つ所大であつたと思はれる。

斯くの如く日本は環境的に共同體的性格付けをなされたのであるが、日本は民族的血液的にも共同體的に性格づけられてゐるのである。けだし、周知の如く、日本民族ほど多くの血の混淆より成れる民族は稀である。而も混血民族は民族的統一性に於いて缺ける所があるのを普通とするが、民族的統一性の強靱なる點に於いても日本は他に多く類例を見ないと言はれてゐるのである。而して正に民族的統一性に於いて優れてゐるが故に、よく自己自身を維持發展せしめて來たのであるが、而も、斯く自己自身を維持發展せしめて來た所の日本民族は、多くの血の混淆より成れるものであるが故に、如何なるものにも順應し、如何なるものにも免疫性を有し、如何なるものをも理解し活用する能力を、血液的にも持つてゐるのである。

斯くの如く日本は血液的にも環境的にも共同體的に性格づけられてゐるのであるが、斯くの如き性格づけの過程に於いて特に決定的に作用したのは、特殊な民族國家の形成及び殊にその特殊な國民國家への發展である。

曩に述べたる如く、原初的血縁共同體は、血の共同と言ふ自然的基礎に本能的に基くものであるが故に血縁外に對しては排他的非共同體的たらざるを得ないのであり、従つてヨリ以上の發展の爲には原初的血縁性を脱皮しなければならぬのであるが、此の脱皮過程は我國に於ては、共同體的關係に入るを承服せざる者を承服せしめると言ふ仕方によつて、即ち、天皇の御祖神たる天照大神がすべての氏の共同神とされると言ふ仕方によつて、即ち、すべての氏の共同神なる天照大神の直裔であり現人神なる天皇を中心とする氏族國家の確立と言ふ仕方によつて、行はれたのである。即ち、我國の國家形成過程に於る原初的血縁共同體の原初的血縁性の脱皮は血縁の原初性の脱皮によつて行はれたのであり、血縁性は高められて飽くまで維持發展せられたのである。即ち我國は

4) 日本の惟神の「神」は god とは異なる。惟神の神は飽くまで聖なる神であるが、人格から全然超越した神ではない。

其の氏族國家としての確立に際して、原初的血縁共同體の原初的血縁共同體的性格を脱却して、文化的、地緣的、共同體的性格を獲得し、斯くすることによつてはじめて國家として確立するのではあるが、而も原初的血縁共同體の血縁共同體的性格は之を全然喪失する事なく高められたる姿に於て之を發展的に繼承し、本質的には天皇中心の高次血縁的地縁共同體として確立されたのである。

斯くの如く、天皇中心の高次血縁的地縁共同體としての我國は天皇中心の氏族國家と言ふ形態に於いてはじめて確立されるのであるが、氏族國家には民族的制約があるのであり其の制約は國家の發展が一定の段階に達する時にはヨリ以上の發展の妨げとなるので、やがては民族的制約の脱皮が必要となり、其の脱皮過程の試練を國家は經なければならなくなる。

人口が増加するにつれ灌漑が必要となつて來るのであるが、灌漑は地縁を持つ諸氏族間の協業を必要とするのであるから、指導的氏族によつて此の諸氏族間の協業が確保されねばならぬ。従つて、天皇中心の氏族國家として形成されたる我國に於いては、天皇の御指導の下に灌漑事業が進められるのである。斯くして、崇神朝より履中朝にかけての五百年近くの間は、朝廷の御指導の下に開拓された水利施設に關する記事の多き事が特に我々の注目を呼んでゐるのである。而して斯くの如く御歴代の天皇の御指導の下に灌漑事業が進められた事によつて、我國の天皇中心の血縁共同體的性格は愈々確固たるものにならしめられたと思はれるのである。

然るに、天皇の御指導の下に灌漑事業が進められる事になれば、國家が未だ氏族國家に止まる限り他の有力なる氏の上も亦之に倣ふ事にならざるを得ない。然るに灌漑事業は夫が民族的序列に於て總ての氏に長たる天皇の御指導の下に行はれる時には氏族國家體制を確固たるものにするのであるが、其他の者の指導の下に行はれる時

には、其の指導は氏族的序列に當然基礎付け得られるわけのものでないで、氏族國家體制に動搖を來すものであり、従つて、氏族の序列によらざる社會的勢力の獲得を目ざす土地兼併即ち所謂田莊の集中を伴ふのでありそれによつて氏族國家體制の動搖を激化せしめるのである。斯くして「或は誤りて己が姓を失ひ、或は故らに高き氏を認む」者が現はれ、「或は帝皇の裔、或は異しくて天降り」と僭稱する者が出て來て、允恭朝の頃から以後百年餘りは誅伐の記事が特に目立ち、灌漑の記事は殆んど全く其の姿を沒するに到る。斯くの如き情勢の下に於ては、農民の生活も亦窮迫せざるを得ない。例へば欽明朝に「二十八年丁亥、群國大水いでて飢ぬぬ、或は人相食む」とあるのも、決して偶然の事とは考へられぬのである。而して又、斯くの如き情勢の下に於ては國威は對外的にも毀損されざるを得ない。

斯くの如く、天皇中心的氏族國家と言ふ形態に於いて確立されたる天皇中心的高次血縁共同體國家としての我國は、そのヨリ以上の發展に對し其の氏族的制約が妨げとなりたる爲に、氏族的制約脱皮過程の試鍊を受ける事になつたのであるが、此の試鍊に對處せんとする場合に先づ想到せられる事は、氏族的國家體制の動搖の現象的原因たる姓名混亂を去除く事である。斯くして盟神探湯の詔を拜することになるのであるが、既に氏族制自體が我國のヨリ以上の發展の妨げとなつてゐるのであるから、此の試鍊期を脱する爲には國家は氏族的制約そのものを脱皮しなければならぬ。然るに我國は天皇中心の共同體國家的性格強きが故に、支那との交通によつて學び得たる王土王民的思想を消化して、此の脱皮過程の思想的指導に役立たしめ得たのである。「國に二君なく、民に兩主なし、率士の兆民、王を以て主となす。所任官司は、皆是王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せん」との聖德太子の憲法の思想は即ち之であり、やがて大化の改新として實を結ぶのである。

大化の改新は當時の舊體制の中心勢力たる蘇我氏を滅亡せしめる事を第一着手として、順次に斷行せられた。

それは、大化改元の詔にある如く、「君には二政なく、臣には朝に二なかるべ」きことを、即ち、天皇中心的國體の明徴を、期せるものであり、大化元年九月の詔にある如く、「或は數萬頃の田を兼ね并せ、或は全く針を容るゝの少地も無」かりし當時の非共同體的現狀を改革することを、即ち天皇中心的共同體的國體の明徴を、期せるものである。従つて、大化改元の詔に於て、「子代の民、處處の屯倉及び別に臣、連、伴造、國造、村首の所有する部曲の民、處處の田莊を罷め」、民族的體制を破棄し、中央集權的行政組織を採り、「初めて戸籍、計帳、班田收授の法を造」り、共同體的國家經濟を實現し、それに照應せる租稅制度を實現せられることになつたのである。

斯くして、天皇中心的民族國家と言ふ形態に於て確立されたる天皇中心的共同體國家たる我國は其の民族的制約の脱皮をなし天皇中心的國民國家に高まるのであるが、此の飛躍によつて我國體の天皇中心的共同體的性格自體も亦ヨリ強固なるものにされるのである。けだし、大化改新の重要な一部分である所の班田收授の法は、元來支那の制度の模倣に成るものであるにかゝはらず支那の制度と其の趣旨を異にし、支那の制度が租稅增收を目的とし擔稅能力に應じて田を支給せるに反して國民の生活の保障を目的とし國民の生活の必要に應じて田を班給し、又、支那の制度が富める者に對して比較的有利にせるに反して却つて貧しき者に厚くせるものであり、結局共同體的國家經濟の實現を目的とせるものであるが、而も、他方生産力の増加を來し得る構造を持てるものであり、従つて其の目的を或る程度實現し得たのであるから。班田收授の法に含まれたる生産力増加の構造は、主として、土地の使用収益が氏より離れて戸に歸するに至りたることに存するのであるが、更に、國庫收入の増加によつて農業技術の指導や灌漑事業の遂行が容易にされた點を忘れてはならないのである。

斯くして民族的制約脱皮過程の試練を経ることによつて我國體は愈々強固にされたのであるが、この國體の最も本質的なものは次の三點である。即ち、一、共同體従つて國家には常に其の全體性を體現せる中心があるので

あるが、我國の場合には其の中心が天皇と言ふ人格であり従つて國家の全體性が天皇に於て人格化されてゐるが故に、國家の全體性と人民との間には人格的關係が成立するのであり、二、而も天皇と人民との間の其の人格的關係は「億兆の父」と「赤子」との血縁的愛の關係であるが故に、血縁的關係の強靱性を持つのであり、三、而も天皇は神裔なるが故に萬世一系であり現人神であり、従つて、天下億兆すべてに、従つて世界各國に、其の處を得しめ世界を愛の家となさんとせられるのであり、其の意味に於いて現人神であるのもあり、従つて天皇と人民との關係は斯くの如き意味の神と人との關係でもあるであり、従つて血縁的關係でありつゝ血縁的排他性を超越せるものである。高次血縁的關係と呼ばれるのは此故である。従つて天皇は、高次血縁共同體國家の中心として其の歴史的全體性を荷負はせられる現人神なるが故に、天下億兆の本質的に念願する所を實現する事を御念願になり、其の一人も其の處を得ざる勿らしめんと御宸念あらせられるのであり、人民は天皇に對しすべてを捧げ奉り、天皇の赤子として天皇の大御心を體して生きんとするのであり、従つて大御心を體して夫々其の分に應じて相互に生かし合はんとするのであり、それによつて國運が進展し、國體の精華が發揮されるのである。

斯くの如く日本は血液的にも環境的にも共同體的に性格づけられ、特殊な氏族國家の形成及び殊にその特殊な國民國家への發展を経て實踐的にも共同體的な性格を強め、天皇中心の高次血縁共同體的國家として確立されそれとして強化されて來たのであるが、此の事は當然日本經濟を一貫して支配する所の經濟原理をして特殊的性格を有するものたらしめるのである。此の日本の經濟原理の特殊的性格は、人の物に對する關係と人の人に對する關係との二方面にあらはれる。

先づ人の物に對する關係に就いて之を見るに、日本の經濟原理は人と物との調和の世界に、従つて異りたる段階の欲望の間の補充關係に、惹きつけられる性格のものであり、人の爲の物の征服、物の一方的手段化に徹し得

5) 日本の國體を強固ならしめたものとしては、此の歴史段階では更に多くのものが掲げられねばならぬが、就中、記紀の編纂を擧げねばならぬ。

ない性格のものであり、従つて、一方的に犠牲として生産をなし一方的に享樂として消費をなすのでなく、生産の中に創造の歡喜を覺え、消費の中にヨリ高き自覺への責任を感ずる、と言ふ性格を強く持つのである。

次に、人の人に對する關係に就て之を見るに、日本の經濟原理は、生産や消費の過程に於ける人々の間の補完的調和の世界に惹きつけられる性格のものであり、指導者は被指導者を一方的に手段視することに徹し得ず指導者としての責任感と恩情に支配され被指導者の本質的に念願する所に聽從せんとし、被指導者は指導者に對し徹底的に對抗的たり得ず寧ろ悅伏的であり極めて從順であり、而も此の指導者對被指導者の關係は順を追つて國家經濟の全面的指導者と被指導者との間の關係に及ぶのである。併し、指導者に對する被指導者の此の從順さは、單なる從順さではなく、本質的には指導者が指導者としての分をつくし其の分に應じて生かされ得るやうに指導者に協力することに於いて被指導者が其の分をつくし其の分に應じて生かされようとする所から來る從順さである。従つて、指導者が如何にするも其の分をつくさざる場合には天皇の大御心を體して其の指導者を打倒しようとする努力に轉化するが如き性質の從順さでもある。即ち日本の經濟原理は斯くの如き特殊の仕方にて人々の間の補完的調和の世界に惹きつけられる性格のものであり、特殊の共同體の性格のものである。

斯くの如き性格の日本の經濟原理は、例へば之を、全體主義的補完關係強制的なる性格強き獨逸的經濟原理、個人主義的目的手段峻別的なる性格強き英國的經濟原理、共同體的補完關係的なるも其の作用が國家と對立する狭き意味に於ける社會に限られる性格の支那的經濟原理と對比するとき、其の特徴を最も明確にかむ事が出来るのである。而して斯くの如き日本の經濟原理は、我々が曩に一般的經濟原理の理念的形態として展開したるものものに最も近似するものであり、其の意味に於いて、日本の經濟原理は新しき世界の經濟原理として指導的役割を演じ得べきものである。

日本の經濟原理は一般的經濟原理からすれば特殊の經濟原理であるが、日本經濟に關しては一般的に支配する原

理であり、日本の一般的經濟原理である。従つて恰も一般的經濟原理がヨリ具體的には時代的規定を受けて作用するやうに日本の經濟原理もさうである。此の事は曩に述べたる我が國體に關しても言はるべき事である。

む す び

右に於いて我々は日本の經濟原理が如何なるものとして如何に形成されたかを瞭かにしたのであるが、斯くの如き經濟原理を正に日本の經濟原理として學問的に確立するが爲には、歴史的に夫が一貫して日本經濟を支配せる事を瞭かにし、實踐的に夫が日本經濟の革新の指導原理たり得る事を瞭かにしてかゝらねばならない。私は此の事を次の機會に讓るのであるが、こゝに特に一言だけ注意して置く必要がある。ただし日本經濟は瞭かに、上述の日本の經濟原理から直接想像出來るであらうが如き姿を常に採つて來たわけではない、否、場合によつてはそれとは正に相反するが如き姿をすら採つて來た。従つて、日本經濟の現象が上述の日本の經濟原理から直接想像出來るが如き姿を常に採つて來たか否かを検討すると言ふやうな事は當初から問題にならない。其の意味に於いてならば上述の日本の經濟原理は實は日本の經濟原理でないと言はなければならぬのは見えすいた事である。だから、上述の日本の經濟原理が一貫して日本經濟を支配して來たと言ひ得るか否かの問題は、上述の日本の經濟原理が本質的に常に日本經濟を支配して來たか否かの問題としてはじめて問題になるのである、日本經濟が上述の日本の經濟原理に背離せる現象を呈せる時代があるとしてもその現象が其の奥に作用せるものが他ならぬ上述の日本の經濟原理であると言ふ事を知る事によつてはじめて理解出來る如きものであるか否かの問題として、日本經濟が停滯してゐる時代があるとしても其の停滯が日本經濟の奥に作用せるものが他ならぬ上述の日本の經濟原理である事を前提することによつてはじめて充分に説明つく如きものであるか否かの問題として、且、日本經濟がやがては上述の日本の經濟原理にふさはしき姿を採り上述の日本の經濟原理によつて窮極的發展を約束されてゐると言ひ得られるか否かの問題としてはじめて問題になるのである。此の事は曩に述べたる我が國體に關しても言ひ得られる事である。